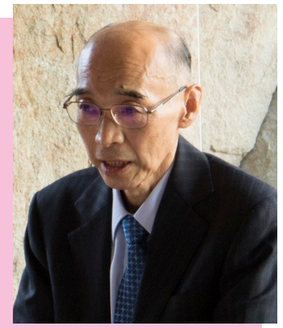
『文化創造都市白河』に向けて

今回は、市制施行10周年記念式典で公表された「文化創造都市宣言」をテーマに、今後の具体的な取り組みについて、しらかわ大使の皆さんからご意見をいただきました。
今月号では、その内容を抜粋してお届けします。

▲懇談会に参加した市長と「しらかわ大使」の皆さん（２月24日/東京都）

「古いもの」から「新しいもの」を創造する


Hitomi Nobuo
人見信男 氏
㈱サン綜合管理代表取締役社長、元警察庁交通局長・元警視庁副総監

キーワードは「温故知新」。特に「新らしきを知る」の部分が重要で、いかに現代にマッチした新たな文化を創造できるかだと思います。以前、京都に住んでいたことがあります。京都は千年の都ですが、決して古臭く感じません。むしろ新しい文化価値を常に生み出してます。

時代祭は、明治28年に始められた比較的新しいお祭りですが、平安時代を起源とする葵祭、祇園祭とあわせて、京都三大祭りのひとつにまで価値を高めました。

和菓子の「八つ橋」は、その歴史を江戸時代まで遡りますが、観光土産で人気の「生八つ橋」は戦後に考案された新しい食文化です。「古いもの」をその時代に受入れられる「新しいもの」に再編成することが大切です。

「故きを温ねて」の基盤になるのは歴史です。白河には、南湖公園、白河の関、小峰城や提灯まつりといった古くていいものが残っています。5月に小峰城を舞台に開催される薪能のような、古いものとコラボした新しい取り組みを世界に発信してはどうでしょうか。

共感力を高めるための経験の場

Toida Kazuhiko
戸井田和彦 氏
ファルテック取締役社長、元日産自動車㈱常務執行役員

日産自動車の常務時代に、ゴーン社長から「共感力」について、徹底的に教え込まれました。国際的に活躍する人の共通点として、「自分とは違う人に興味を持ち、共感し、敬意を払う姿勢があるところだ」と彼は言います。グローバルなビジネスを展開するうえでは、語学にもまして重要だと何度も聞かされました。

私の会社でも、社員の共感力を高めるために、海外の工場から人材を投入しています。共感力を高めるためには、自分と違うものに接する経験が必要であり、その機会と環境を整備することは、企業が成長するために必ず必要なことです。

行政や教育についても同じことが言えると思います。外国人による語学指導はいい例ではないでしょうか。文化創造都市宣言によって、市民にどのようなメリットを提供できるかが大事なことです。文化芸術には、表現力を高め、他者との共感を可能にする力があります。若い人達に、多くの経験の場を与え、グローバルな世界で活躍できる人を育ててほしいと思います。

歴史的資源を生かしたまちづくり

Taguchi Shintaro
田口信太郎 氏
東邦銀行取締役、元NHK福島放送局長

白河の究極の資源は、南湖公園だと思います。国では「歴史的資源を活用した観光まちづくり」を進めていて、2020年までに全国で200の地域を指定し、地域に残る古民家等の歴史的資源を観光や地域振興に生かそうとする、新たな取り組みを進めています。ふるさと納税の活用や都市計画法等の規制の見直しなども検討され、この取り組みを南湖公園でできたら面白いと思います。古民家を集積させ、茶道や華道のワークショップを実施したり、定信公との歴史を絡めて何か企画をしかけたら、たくさんの人を呼び込めると思います。

コミネスの公演事業にあわせて南湖公園まで巡回バスを走らせたり、ふるさと納税をした方を体験型ツアーに招待することも面白いと思います。有名なアーティストを招へいすることも大事ですが、こんぴら歌舞伎の金丸座や松本市のセイジ・オザワ松本フェスティバルなどのように、この時期に白河へ行けば面白い文化体験ができると習慣づける継続的な取り組みが大切だと思います。

白河にしかない文化を磨き上げる

Nozaki Hiromitsu
野﨑洋光 氏
「分とく山本店」総料理長

芸術を創るのは人であり、文化を創るのは市民だと思います。大河ドラマ「真田丸」の題字を書いたのは書家ではなく、左官職人がコテで土壁に書いたものです。左官職人を芸術家と認識したことはありませんでしたが、作品に触れ共感を覚えました。共感から感動が生まれたとき、それは芸術といえます。かつて農家で日常的に作られていたムシロや日本人のおもてなしの心でさえも、感動を与えるほどに磨き上げれば、芸術といえます。料理もそうですが、高いレベルに到達するためには、その裏側を知り、理解する必要があります。芸術舞台の裏側を見せることも大切です。

私たちが捨ててしまった日本古来の風習の中には、外国人にとって魅力的なものもあります。日本人は祭りや二十四節気、七十二候の年中行事を通じて人間形成の基礎を養ってきました。白河にしかない無形文化や品格をもう一度見つめ直し、ひとりひとりの活動を街に残せば、コミネスに訪れた人々が、白河の芸術性に共感するのではないでしょうか。

現代日本文化とのコラボレーション

Kawase Nanao
川瀬七緒 氏
第57回江戸川乱歩賞受賞作家

昨年末から白河を舞台に服飾文化を題材とした連載を書いています。これを書くにあたり文化とは何か、文化がどのようにできるのかを考えていました。歌舞伎などの伝統的文化はもちろんですが、現代の日本文化も世界中で認められています。具体的な例として、ボーカロイドの「初音ミク」があげられます。著作権で使用を制限するのではなく、広く一般に開放したことで、大勢のクリエイターが「初音ミク」で音楽を作り、インターネット上に投稿し、一躍ムーブメントを起こしました。ひとつの〝フック〟に大衆が巻き込まれ、本人も予測不可能な方向に転がっていくのが、文化の出来る過程なのではないかと考えています。

ベートーベンの交響曲「第九」が日本で初めて演奏された徳島県では、オーケストラと初音ミクがコラボし大きな反響を呼びました。コミネスがオープンしたと聞いたときに、初音ミクとコラボできないかと考えました。その集客力と知名度はもの凄く、白河を世界に発信するひとつの〝フック〟になると思います。